

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02257

研究課題名（和文）児童虐待におけるネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントシートの研究・開発

研究課題名（英文）A Developmental Study of Riskassessmentsheets on Neglect and Psychological abuse riskassessment sheets on Child abuse

研究代表者

山田 麻紗子（YAMADA, Masako）

日本福祉大学・福祉社会開発研究所・客員研究所員

研究者番号：90387746

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：児童虐待全体の7割を占めるネグレクト・心理的虐待に有用なリスクアセスメントシートが、児童相談所（以下、「児相」）の実務現場にはない。発見が遅れて長期化し、児童に深刻な影響を及ぼしている現状から同シートの研究・開発は喫緊の課題であった。

研究では、まずA児相の下1万件超のデータをAIにより分析して特徴を掴み、次に中堅職員から複数回担当した同一ケースの理解と対応方法、複数職種の職員からもケース理解、リスク掌握方法を聴取り、現場の知見を把握した。更に、海外の研究協力者と研究会を開催し、両虐待の特徴理解を深めた。以上を基に研究を推進し有用な同シートと同手引きの開発、3本の論文をジャーナルに投稿できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ネグレクト・心理的虐待に有用なリスクアセスメントシートおよび同手引きを研究・開発し、研究経過と内容を冊子にして研究協力児相に配布し、実践に導入しやすくした。これらを利用すれば、児相が両虐待事例の特性理解を深め、被害児対応を的確に行うことにつながるなど、社会的にも意義がある。

また、ジャーナルに3本の論文を投稿した。2022年度に発刊された論文は社会福祉学第64巻第3号（2023）「2022年度学会回顧と展望 子ども家庭福祉部門」で倉石哲也氏（武庫川女子大）から「児相による一時保護の判断のプロセスについて明らかにし、一時保護の司法審査導入を見据えたいうえでも興味深い」と学術的意義を評価された。

研究成果の概要（英文）：A risk assessment sheet useful for neglect and psychological abuse, which account for more than 70% of all child abuse, is not available in the child abuse practice. The research and development of this sheet was an urgent issue, given the current situation of delayed detection, prolonged abuse, and serious consequences for the child.

Next, we interviewed mid-career staff who had been in charge of the same case multiple times about their understanding, assessment, and response methods, as well as staff from multiple occupations about their understanding of the case and methods for grasping risks, in order to gain an understanding of knowledge in the field. Furthermore, we held study meetings with overseas research collaborators to deepen our understanding of the characteristics of both types of abuse. Based on the above, we developed a useful sheet and guide and submitted three articles to journals.

研究分野：臨床心理学 非行犯罪心理学、犯罪心理鑑定、児童虐待、家族心理臨床

キーワード：ネグレクト・心理的虐待に特化したアセスメントシート 児相での実務の立場に寄り添ったシートの開発  
ネグレクト・心理的虐待の特徴 海外との比較研究

## 1. 研究開始当初の背景

2018年に全国の児童相談所(以下、「児相」)が対応した児童虐待件数は159,838件(速報値)と過去最高となった。内訳をみると、対応件数中最多は心理的虐待で88,391件(55.3%)、2番目が身体的虐待で40,238件(25.2%)、次がネグレクトで29,479件(18.4%)、ネグレクトと心理的虐待を合わせると117,890件、全体に占める割合は7割以上(73.1%)となるなど、年々両虐待の占める割合が増加していた。また、2018年は、虐待による子どもの死亡原因としてネグレクト(25人、46.3%)によるものが身体的虐待(23人、42.6%)を初めて上回った。ネグレクトは最も深い傷を子どもに残し、長じての生活に大きな害を及ぼすこと、心理的虐待は近年の脳科学等の研究の進化により、被害児に及ぼす影響の深刻さが明らかになっている。ネグレクト・心理的虐待ケースへの的確な対応が早急に求められている状況に対し、A市をはじめ、全国の児相は、『一時保護決定に向けてのアセスメントシート』(厚生労働省、2013)を参考にして、リスクアセスメントを行っていた。このシートは、身体的虐待のように周囲が気づきやすく子どももSOSを発し易い、性的虐待のように発見は難しいものの深刻さが理解されやすい虐待のアセスメントには有用だが、特性の異なるネグレクト・心理的虐待のアセスメントには限界があった。

本研究開始時において、ネグレクト・心理的虐待に有用なリスクアセスメントシートの研究・開発は、喫緊の課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、児相がネグレクト・心理的虐待ケースのリスクを的確に評価できるリスクアセスメントシートの研究・開発を目的とした。

ネグレクト・心理的虐待は、身体的虐待や性的虐待とは異なった特性がある。例えば、外見上見え難いこと、深刻さが十分に理解されていないこと、範囲が広い上に曖昧であること、加害側だけでなく被害者である子どもにも虐待の自覚がなくSOSを発し難い等である。また、児相に通告があっても、生命の危険性が低いなどの理由から、口頭での指導等で短期間に終了してしまい、保護者の意識や養育態度は改善されずに虐待が長期化する。こうしたことから、子どもの負う発達・感情・行動上の悪影響が深刻になって、初めて一時保護されるケースも少なくない。子どもの人権擁護の観点からも、児相がネグレクト・心理的虐待のリスクを的確にアセスメントできるシートの開発が必要であった。

## 3. 研究の方法

量的研究と質的研究の両面から、研究チーム(代表と研究分担者の計4名)は名古屋児童虐待研究会を開催(2018年4月から2024年3月までに82回)して研究を推進した。

量的研究は、2018年4月からA市児相との共同研究として開始した。同児相が日常的な援助活動により蓄積した基礎データ(2015(平成27)年度から2017(平成29)年度の3年間に受理したケースの相談台帳および対応台帳に記載されたデータ)を結合した延べ11,024件の提供を受け、産業技術総合研究所(以下「産総研」)の協力の下にAIを使用して、ネグレクト・心理的虐待の特徴を探求する目的で2018(平成30)年度に分析を行った。

2019年度以降は、質的研究として複数回ネグレクト・心理的虐待で通告されたケースの担当職員に、インタビューを3回実施した。その目的は、虐待ケースの受理から終結までの児相

の援助プロセスを検討することを通して、ネグレクト・心理的虐待に対するリスクアセスメントの視点を明確にすることであった。インタビュー内容を基に複線経路等至性アプローチ（TEA）を用いて、【ケース終結】を等至点（EFP）とするモデルを作成した。2つ目の質的研究として、A市児相職員（福祉司、心理司、一時保護所職員等）計16人にインタビューを複数回にわたって実施し、得られたデータは構造構成主義的質的研究方法（SCQRM）をメタ研究方法とした修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）により分析した。いずれのインタビュー実施にあたっては事前に所属所長の書面による同意、協力職員にも丁寧な説明の後に同意を得るなど、倫理的配慮を行った。

データを分析、検討した結果からネグレクト、心理的虐待のリスクアセスメントを実施する際に、それぞれに特徴的で必要不可欠なチェック項目を抽出した。また、それらを基に現在使用されているリスクアセスメントシートの項目に加筆修正や新たな項目の追加などを行い、有用なリスクアセスメントシートを開発した。併せて「同シートの手引き」の開発も行った。更に、韓国、アメリカの児童虐待研究者や実務家とオンラインで、児童虐待の現況、ネグレクト・心理的虐待の特徴、子どもや家族の特徴等について意見交換を行い、その結果も貴重な知見として、同シートおよび同手引きの加筆修正に使用した。加えて、研究推進期間中は、年2回程度A市児相職員等に報告会を開催して研究・開発の経過と内容を報告し、意見交換を行った。報告会の場で得られた職員の意見や要望を前述の研究会で検討し、研究に役立てた。

国際比較研究として韓国、アメリカの研究協力者とのオンライン研究会を複数回行い、最終年度には韓国の関係機関を訪問し、現地調査を実施した。

#### 4. 研究成果

量的研究、質的研究から得られたデータを分析、検討した結果からネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントを実施する際に、それぞれに特徴的で必要なチェック項目を整理した。それらを基に現在使用されているリスクアセスメントシートの加筆修正、新たな項目の追加などを行い、両虐待に有用なリスクアセスメントシート「一時保護決定のためのリスクアセスメント（ネグレクト・心理的虐待）」と「同シートの手引き」開発ができた。

本研究開始からの経過と推進できた内容や結果をまとめ、開発したシートとその手引きも入れた冊子を発刊し、A市児相に配布することが出来た。

本研究により次の2本の論文と1本の研究ノートの原稿化、学会で3件の発表を行った。

- (1) 千賀則史・山田麻紗子・渡邊忍・姜民護「複数回の児童虐待通告があった事例への援助プロセスに関する質的研究：児童相談所のリスクアセスメントに焦点を当てて」『子ども家庭福祉学』20、108-119、2020.11.25 発行
- (2) 千賀則史・姜民護・山田麻紗子・渡邊忍「ネグレクト・心理的虐待事例における児童相談所の一時保護の判断に関する質的研究」『子ども家庭福祉学』22、56-68、2022.11.25 発行
- (3) 山田麻紗子・渡邊忍・姜民護・千賀則史・李東振「韓国における児童福祉を巡る改革の現状と課題 - 保育・権利保障・協議離婚制度・虐待対応に関する関係機関の訪問・調査報告 - 」『日本福祉大学社会福祉論集』151号、2024.9 発刊予定（研究ノート）
- (4) 日本子ども虐待防止学会第26回学術会議いしかわ大会（2020年11月28日～29日）  
自主企画シンポジウム「児童相談所におけるネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントシート開発に向けて」
- (5) 日本子ども家庭福祉学会第21回全国大会（2020年6月6日）東洋大学白山キャンパス

自主研究発表「児童相談所のネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントに関する質的研究 ～児童福祉司・児童心理司・一時保護所職員の視点から～」

(2)は、「2022年度学会回顧と展望『子ども家庭福祉部門』」(社会福祉学第64巻第3号 2023 P132-144)において、倉石哲也氏(武庫川女子大学 教授)から「ネグレクト・心理的虐待事例における児童相談所による一時保護の判断プロセスについて明らかにした研究として興味深い。～略～本研究は、法改正に含まれる一時保護の司法審査の導入を見据えたうえでも興味深い研究である。」との評価を頂いた。

最後に、産総研に依頼して実施した分析の中で、AIが一時保護および再虐待の予測を不能とした事例がおよそ100件あった。それら全事例について、A市児相から提供された児童相談受付票(受理会議資料)または援助方針会議資料および一時保護検討のためのリスクアセスメントを精読した。そのうえで、両虐待の特徴について分析し、通告児の年齢と男女比、通告機関および通告形態、リスクレベルと過去の相談・通告歴、虐待内容の他、合計8項目に沿って検討とまとめを行った。その結果、ネグレクト・心理的虐待の種別ごとの特徴を具体的に把握することが出来た。ただ、事例数が少ないため公表するまでの研究には至らなかったが、本研究を推進するうえでの知識としてネグレクトと心理的虐待の違いを明らかにできたことは、参考になった。また、AIが予測不能であった理由も明らかになり、今後新たな分野の開拓研究として意味があると思う。(4)に記載したいしかわ大会自主企画シンポジウムにおいて、「AIからはじかれた児童虐待事例(ネグレクト・心理的虐待)」の検討から」のテーマで発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 千賀則史 姜民護 山田麻紗子 渡邊忍	4. 巻 第22号
2. 論文標題 ネグレクト・心理的虐待における児童相談所の一時保護の判断に関する質的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本子ども家庭福祉学	6. 最初と最後の頁 pp56-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千賀則史 山田麻紗子 渡邊忍 姜民護	4. 巻 第20号
2. 論文標題 複数回の児童虐待通告があった事例への援助プロセスに関する質的研究 - 児童相談所のリスクアセスメントに焦点を当てて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子ども家庭福祉学	6. 最初と最後の頁 108-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 千賀則史 山田麻紗子 渡邊忍 姜民護
2. 発表標題 「児童相談所のネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントに関する質的研究～児童福祉司・児童心理司・一時保護所職員の視点から～」
3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会第21回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田麻紗子 渡邊忍 千賀則史 姜民護
2. 発表標題 児童相談所におけるネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントシート開発に向けて
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術集いしかわ金沢大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 千賀 則史 山田麻紗子 渡邊 忍 姜 民護
2. 発表標題 児童相談所のネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントに関する質的研究 ～児童福祉司・児童心理司・一時保護所職員の視点から～
3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡邊 忍  (WATANABE Shinobu)  (50634606)	日本福祉大学・社会福祉学部・教授   (33918)	
研究分担者	千賀 則史  (SENGA Norihumi)  (70803782)	同朋大学・社会福祉学部・准教授(移行)   (33911)	
研究分担者	姜 民護  (KANG Minho)  (60802254)	同志社大学・社会学部・助教   (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------